

平成26年度事業報告書

(平成26年4月1日～平成27年3月31日)

1. バドミントンの普及及び指導

(1) ジュニアに対する普及・指導活動の充実と社会人愛好者の組織づくりへの助成活動を進め、会員の拡大を図り30万人の目標には至らなかったが260,758名の会員を得た。

(2) 第23回全国小学生バドミントン選手権大会

12月25日から12月29日までの5日間、新潟市東総合東総合スポーツセンター他1会場で役員延820名の指導により、男子の部団体49団体、女子の部団体49団体、6年生以下男子単43名、同複35組、女子単43名、同複35組、5年生以下男子単37名、同複35組、女子単37名、同複35組、4年生以下男子単35名、同複35組、女子単35名、同複35組、実人員812名の参加で実施。優勝者は男子団体新潟県、女子団体東京都、6年生以下男子単稲光翔太郎(茨城)、同複木田悠斗・中村舜組(福井)、同女子単郡司莉子(東京)、同複宮下澪奈・宮下彩奈組(茨城)、5年生以下男子単武井凜生(東京)、同野口翔平・小原輝組(東京)、同女子単杉山薫(茨城)、同複八角真帆・秋庭夢来組(埼玉)、4年生以下男子単平田璃月(岡山)、同複林頭吾・櫻井煌介組(栃木)、同女子単吉川天乃(岡山)、同複岩西真邦・藤田美咲組(東京)で、導入期の少年に正しい競技を習得させるとともに、少年層の普及に成果を収めた。

(3) 第15回全国小学生ABCバドミントン大会

8月15日から8月17日までの3日間、一般財団法人地域活性化センターの支援を受け、八代市総合体育館他1会場で、役員延790名の指導により、男子Aグループ61名、同Bグループ54名、同Cグループ49名、女子Aグループ61名、同Bグループ53名、同Cグループ48名、実人員326名が参加し開催。優勝者は男子Aグループ内野陽太(埼玉)、同Bグループ崎野翔太(北北海道)、同Cグループ松川健太(神奈川)、女子Aグループ郡司莉子(東京)、同Bグループ伊藤歩(北北海道)、同Cグループ樋口吹羽(徳島)で、導入期の少年に正しい競技を習得させるとともに、少年層の普及に成果を収めた。

(4) 第13回日本バドミントンジュニアグランプリ2014

11月21日から11月23日までの3日間、一般財団法人地域活性化センターの支援を受け、仙台市体育館他1会場で、役員延820名の指導により、男子の部38団体、女子の部37団体、実人員598名の参加のもとに開催。優勝者は男子団体埼玉県、女子団体埼玉県で、全国各都道府県ジュニア選手育成の一貫指導体制の確立促進を図るとともに、ジュニア層への普及に大きな成果を収めた。

(5) 第30回若葉カップ全国小学生バドミントン大会

8月1日から8月4日までの4日間、長岡京市西山公園体育館で、役員延910名の指導により、男子の部38都道府県48チーム、女子の部40都道府県48チーム、実人員886名が参加し開催。優勝者は男子の部香川スクール(香川)、女子の部橿原ジュニア(奈良)で、少年少女相互の交流と体力の増強と健全で豊かなスポーツの育成に効果を上げた。

(6) 第44回全国中学校バドミントン大会

8月19日から8月22日までの4日間、西条市総合体育館で、役員延995名の指導により学校対抗男子24校、女子24校、男子単36名、同複36組、女子単36名、同複36組、実人員450名が参加し開催。優勝者は学校対抗男子浪岡中(青森)、同女子猪苗代中(福島)、男子単奈良岡功大(浪岡中)、同複金子真大・久保田友之祐組(猪苗代中)、女子単高橋明日香(猪苗代中)、同複由良なぎさ・永井瀬秀組(猪苗代中)で、公益財団法人日本中学校体育連盟との共催で中学生に正しい技術を習得させることができた。

(7) 第15回全日本中学生バドミントン選手権大会

平成27年3月20日から3月22日までの3日間、新潟市東総合スポーツセンター他1会場で、役員810名の指導により、都道府県対抗男女混合団体49チーム、実人員423名が参加し開催。埼玉県が優勝し、中学生の健全育成に寄与することができた。

(8) 第43回全国高等学校選抜バドミントン大会

平成27年3月24日から3月28日までの5日間、北海道立総合体育センターで、役員延940名の指導により、学校対抗男子32校、女子33校、実人員467名の参加で開催。優勝者は学校対抗男子柏原高(大阪)、同女子青森山田高(青森)、男子単渡辺勇大(富岡高)、同複渡辺勇大・三橋健也組(富岡高)、女子単齋藤栞(埼玉栄高)、同複山口茜・鈴木咲貴組(勝山高)で、それぞれ高校生の交流と技術の習得に大きな成果を収めた。

(9) 第32回全日本レディースバドミントン選手権大会

7月24日から7月27日までの4日間、都道府県対抗の部は、鹿児島アリーナで、43都道府県44チーム、実人員360名の参加を得開催。優勝者は大阪府。また、クラブ対抗の部は同日、同場所で、39都道府県51チーム、410名の参加で開催。ソークラブ(岐阜)が優勝し、レディースへの普及と正しい競技の習得に大きな成果を収めた。役員延680名。

(10) 第9回全日本レディース(個人戦)バドミントン競技大会

12月12日から12月14日までの3日間、滋賀県立体育館他3会場で、ダブルス個人戦で実施し、41都道府県、実人員1,058名の参加を得開催。優勝者は1部高井亜季代・谷村麻美組(愛知)、2部Aブロック前田芳奈・西本江莉加組(滋賀)、2部Bブロック葛西深雪・木野村法子組(岐阜)、2部Cブロック物井あゆみ・中津位江組(神奈川)、2部Dブロック石原佳子・香山百合子組(岡山)、2部Eブロック小原真澄・佐藤忍組(宮城)、2部Fブロック大石小夜子・井上美智代組(福井)、2部Gブロック田倉テイ子・宮崎美江子組(東京)、2部Hブロック大海ハツミ・小俣ヒロ子組(大分)、2部Iブロック石井伸子・宇野早苗組(山口・神奈川)でレディースへの普及と発展に成果を収めた。役員延960名。

(11) 用器具検査並びに認定

厳正なる検査の結果、第1種水鳥シャトル33種(23社)、第2種水鳥シャトル14種(14社)合成シャトル2種(1社)、ラインテープ6種(4社)、ラケット187種(18社)、ポスト14検定工場、ネット17種(6社)、ストリングス57種(12社)、シューズ76種(12社)、ウエア611種(16社)を認定し、愛好者の使用の便を図った。

(12) 競技規則書等発行

各都道府県協会並びに7連盟で開催する審判講習会・検定会等でルール周知徹底を図るため2014・2015年競技規則(赤本)・ルール教本(2014年版3級・準3級公認審判員資格検定ルール教本「緑本」)を発行し、常に新しい競技規則等の正確な資料を提出し、正しいルールに基づく円滑な試合運営と公認審判員有資格者の増員と資質の向上を図った。

(13) 庶務業務の活性化

全国事務局長会議を開催し、全国の都道府県協会の庶務業務の統一化と活性化を図った。会員登録システムを開始し、登録の一元化を図るとともに登録者の利便性の向上を図った。

(14) 広報活動

HPを活用しての迅速かつ正確な情報公開と広報活動及びマスメディアに対して適時な情報、資料等を積極的に提供することにより、テレビ、新聞等の露出数が増大しPR効果を拡大し、バドミントン競技をより多くの人に理解を広めた。また、ジュニア選手層の開発に向けて、告知ポスター等を作製、全国に配布し、会員、愛好者の拡大を図った。また、主大会のテレビ放映及びWEB配信を促進し、バドミントン競技の理解を深めた。

(15) 学連助成

学連の活動に対して、助成し、同連盟のより活発な活動を図った。

(16) 高体連助成

高体連の活動に対して、助成し、同連盟のより活発な活動を図った。

(17) 中体連助成

中体連の活動に対して、助成し、同連盟のより活発な活動を図った。

(18) 小学生助成

小学生連盟の活動に対して助成し、同連盟のより活発な活動を図った。

(19) 小・中・高一貫指導

「世界で戦える競技者」育成のため、各都道府県協会に小・中・高の一貫指導体制の構築を推進し、ジュニアの育成・強化を実施した。

2. バドミントンに関する審判員及び指導員の養成及び資格の認定

(1) 公認レフェリー資格者の本会第1種大会への派遣

公認A級・B級のレフェリー有資格者を平成26年度実施の全ての第1種大会(23大会)にレフェリーまたはディピュティレフェリーとして派遣し、大会運営全般の統一性と公正化を図った。また定年等で減少するレフェリーの補充のため公認A・B級レフェリー認定研修会を開催し、新たにB級レフェリー17名を公認した。なおA級については3名の受講者が全員が全員筆記試験に合格し、27年度に実義試験を受けることになっている。

(2) 公認審判員養成講習会開催

審判員技術の向上と正しい競技規則書の習得により円滑な大会運営を図るため公認審判員制度を設け、1級審判員検定会を本会が主催し、2級、3級、準3級審判員資格検定会は、地区及び都道府県、7連盟において開催し、公認審判員資格審査認定員に委託した。また、3年に1度開催している公認審判員資格審査認定員の更新研修及び新規認定試験を実施し、新規合格者51名を含む231名を認定した。

(3) 公認審判員の資格認定登録

公認審判員資格登録規程による学科試験、実技試験の合格者を各級公認審判員に認定し、登録させ、各地で実施する大会において正義と公正に基づく円滑な競技会運営を図った。また中高生を対象とした準3級公認審判員資格取得はついに50,000人を突破(現時点54,062名)した。これにより各級3級・2級、1級の資格取得者の増員も果たした。公認審判員資格登録規程に定める試験に合格した1級40名、2級107名、3級5,913名、準3級7,496名、準3級特別移行582名、をそれぞれ登録させ、また同規程により、1級202名、2級402名、3級3,927名、の資格更新登録をした。こうした正しい競技規則の習得や審判技術のマスターは、更なるバドミントン技術の資質向上に役立ち、また、全国の数々の大会においてその審判能力は、大会運営において大きな効果を挙げた。

(4) 国際審判員資格取得試験受講者の養成と国際審判員資格既得者の研修及び活動

本年も、年に一度のBAC認定国際審判員養成セミナーを6月9日から11日まで、東京都(ヨネックスオープンジャパン2014開催時)において開催した。参加者は4名であった。また、資格既得者の研修・活動として国際審判員相互派遣交流大会である台北オープン、マレーシアオープン、香港オープン、フランスオープンに国際審判員を派遣した。また、BWF、BACの指名により国際レフェリー、国際審判員、国際線審を多数の国際大会へ派遣した。これらの派遣事業は国際交流事業に大いに貢献した。

(5) 公認スポーツ指導者養成講習会

公益財団法人日本体育協会と共催して、公認コーチ(バドミントン2級)の養成講習会を11月に前期4日間(新潟市西川総合体育館32名)、27年1月に後期4日間(埼玉県立女性教育会館27名)で開催した。公認上級コーチ27名(内過年度分8名)が専門科目検定試験に合格したことを公益財団法人日本体育協会へ報告した。また、各都道府県バドミントン協会が各々の体育協会と共催で実施する公認スポーツ指導者養成講習会は、公認上級指導員(バドミントン3級)を愛知県・石川県、公認指導員(バドミントン4級)を北海道ほか10県で開催した。

(6) 公認スポーツ指導者の資格認定登録

指導者資格認定制度に登録された各スポーツ指導者の登録更新のために、4年間に1回受けなければならない義務研修会を実施した。公認上級コーチ、コーチの義務研修会は、平成26年9月(味の素ナショナルトレーニングセンター28名)および平成27年2月(埼玉県・国立女性教育会館38名 2日間)に開催した。最新の情報を得ることや、コーチとしての資質の向上を図りながらコーチ間の連帯を深めた。また、27都道府県協会(延33回)で、公認スポーツ上級指導員・指導員のための義務研修会が実施され、指導者としての資質の向上を図った。なお、公認上級コーチ、コーチの義務研修会受講者および各都道府県バドミントン協会から報告のあった公認上級指導員、指導員の義務研修会受講者名を、公益財団法人日本体育協会へ報告した。

3. 公益財団法人日本体育協会、世界バドミントン連盟（BWF）及びアジアバドミントン連盟（BAC）への加盟

(1) 公益財団法人日本体育協会等への代表者派遣

公益財団法人日本体育協会、JOCへ代表者を派遣するとともにその事業に対し、協調、展開し、バドミントン競技の発展を図った。

(2) BWF（世界連盟）総会への代表者派遣

芝スミ子理事(本会強化本部長)・西祐子（国際部員）5月24日、ニューデリー（インド）で開催されたBWF年次総会に派遣し、国際スポーツ振興のため協調し、世界バドミントン競技の発展を図った。

(3) BAC（アジア連盟）総会等への代表者派遣

高橋英夫理事（本会国際部長）を4月27日にグミ市(韓国)で開催されたBAC年次総会に派遣し、アジアスポーツ振興のため協調、アジアバドミントン競技の発展を図った。

4. バドミントンに関する国内競技会の開催

(1) 第64回全日本実業団バドミントン選手権大会

7月2日から7月6日までの5日間、高松市総合体育館他2会場で、男子団体165団体、女子団体38団体、実人員1,904名の参加のもと開催。優勝者は男子団体NTT東日本(東京)、女子団体日本ユニシス(東京)、競技役員延1,200名。

(2) 第65回全国高等学校バドミントン選手権大会

8月1日から8月6日までの6日間、千葉ポートアリーナ他4会場で、男子団体49団体、女子団体49団体、男子単98名、同複98組、女子単98名、同複98組、実人員919名の参加で開催。優勝者は男子団体富岡高（福島）、女子団体富岡高（福島）、男子単古賀穂（富岡高）、同複下農走・常山幹太組（柏原高）、女子単山口茜（勝山高）、同複尾崎沙織・川島里羅組（埼玉栄高）、競技役員延965名。

(2) 第2回全日本学生バドミントンミックスダブルス選手権大会

8月2日から8月3日までの両日、日本体育大学横浜健志台キャンパス米本記念体育館で、実人員68名の参加で開催。優勝者は竹内義憲・木戸よし美(日体大) 競技役員延460名。

(3) 第53回全日本教職員バドミントン選手権大会

8月10日から8月14日までの5日間、墨田区総合体育館他3会場で、男子団体17団体、女子団体11団体、男子成壮年団体19団体、一般男子単95名、同複61組、一般女子単45名、同複36組、30才以上男子単55名、同複30組、30才以上女子単8名、同複5組、40才以上男子単67名、同複43組、40才以上女子単11名、同複9組、50才以上男子単59名、同複45組、50才以上女子単14名、同複7組、60才以上男子単22名、同複15組、65才以上男子単15名、同複10組、70才以上男子単14名、同複5組、実人員630名の参加を得開催。優勝者は男子団体青森県、女子団体香川県、成壮年団体千葉県、一般男子単吉

村諒(長崎)、同複堂下智寛・滝内亮組(埼玉)、一般女子単関谷真由(福岡)、同複松村咲希・鍋井彩果組(香川)、30才以上男子単佐藤伴哉(青森)、同複黒石雅宏・小賀元裕組(高知)、30才以上女子単飯田香里(愛知)、同複関里枝・金子真梨子組(埼玉)、40才以上男子単桐原健(熊本)、同複平岡篤司・千田宏之組(奈良)、40才以上女子単谷藤千香(千葉)、同複坂崎美奈子・木下八枝子組(熊本)、50才以上男子単江藤正治(熊本)、同複江藤正治・三次圭介組(熊本)、50才以上女子単遠江久美子(東京)、同複奥井淳子・永田悦子組(北海道)、60才以上男子単福田光博(東京)、同複片山雅博・竹島理雄組(岡山)、65才以上男子単今里敏喜組(長崎)、同複平井克英・水上英二組(東京)、70才以上男子単廣田彰(宮崎)、同複黒崎二男・宮崎茂樹組(神奈川)、競技役員延920名。

(4) 第16回全国高等学校定時制通信制バドミントン大会

8月18日から8月21日までの4日間、小田原アリーナで、男子団体45団体、女子団体45団体、男子単96名、女子単99名、実人員536名の参加を得開催。優勝者は男子団体長崎県、女子団体北海道、男子単住徳聖也(長崎)、女子単佐藤絵理(新潟)、競技役員延460名。

(5) 第38回全日本高等専門学校バドミントン選手権大会

8月23日・24日両日、松山市総合コミュニティセンター体育館で、男子団体12校、女子団体12校、男子単16名、同複16組、女子単16名、同複16組、実人員276名の参加を得開催。優勝者は男子団体徳山高専、女子団体北九州高専、男子単山下慶将(徳山高専)、同複山下慶将・速金志遠組(徳山高専)、女子単楠城由佳(北九州高専)、同複宮久りさ子・西村唯組(宇部高専)、競技役員延480名。

(6) 第57回全日本社会人バドミントン選手権大会

8月29日から9月3日までの6日間、郡山総合体育館他3会場で、男子単378名、同複279組、女子単113名、同複130組、同混合複152組、実人員955名の参加を得開催。優勝者は男子単坂井一将(東京)、同複井上拓斗・金子祐樹組(東京)、女子単橋本由衣(東京)、同複松尾静香・内藤真実組(東京・千葉)、混合複埤畑亮太・栗原文音組(東京)、競技役員延1,110名。

(7) 第33回全日本ジュニアバドミントン選手権大会

9月12日から9月15日までの4日間、南国市立スポーツセンター他1会場で、ジュニアの部男子単76名、同複57組、女子単75名、同複59組、ジュニア新人の部男子単109名、同女子単111名、実人員888名の参加を得開催。優勝者は男子単渡辺勇大(福島)、同複渡辺勇大・三橋健也組(福島)、女子単川上紗恵奈(福島)、同複斉藤ひかり・曾根夏姫組(青森)、新人男子単中山裕貴(埼玉)、同女子単吉田瑠実(埼玉)、競技役員延790名。

(8) バドミントン日本リーグ2014

9月13日から12月28日までの13日間、高岡市民体育館他13会場で、男子8チーム女子8チーム、実人員281名の参加のもとに開催。優勝者は男子NTT東日本(東京)、女子NTT東日本(東京)、競技役員延1,320名。

(9) 第65回全日本学生バドミントン選手権大会

10月24日から10月30日までの7日間、一宮市総合体育館で、男子団体32団体、女子団体32団体、男子単98名、同複96組、女子単96名、同複96組、実人員732名の参加を得開催。優勝者は男子団体中央大学(東京)、女子団体筑波大学(茨城)、男子単西本拳太(中央大)、

同複高野将斗・宮嶋航太郎組(明治大)、女子単田中志穂(法政大)、同複田中志穂・市丸美里組(筑波大)、競技役員延920名。

(10) 第31回全日本シニアバドミントン選手権大会

11月21日から11月24日までの4日間、ウイングアリーナ刈谷他5会場で、30才以上男子単128名、同複118組、30才以上女子単29名、同複51組、30歳以上混合複74組、35歳以上男子単142名、同複108組、35歳以上女子単45名、同複69組、35歳以上混合複71組、40才以上男子単145名、同複132組、40才以上女子単39名、同複88組、40歳以上混合複103組、45才以上男子単121名、同複96組、45才以上女子単51名、同複86組、45歳以上混合複86組、50才以上男子単94名、同複92組、50才以上女子単56名、同複94組、50歳以上混合複84組、55才以上男子単83名、同複86組、55才以上女子単39名、同複67組、55歳以上混合複67組、60才以上男子単72名、同複76組、60才以上女子単26名、同複51組、60歳以上混合複52組、65才以上男子単58名、同複55組、65才以上女子単22名、同複39組、65歳以上混合複35組、70才以上男子単44名、同複39組、70才以上女子単19名、同複23組、70歳以上混合複27組、75才以上男子単14名、同複12組、75才以上女子単9名、同複12組、75歳以上混合複12組、3,246名の参加を得開催。優勝者は30才以上男子単栗佑貴(静岡)、同複福井剛士・藤本ホセマリ組(埼玉・東京)、30才以上女子単吉岡久美子(大阪)、同複益子友美・松田美穂組(茨城・福岡)、同混合複薄智彦・脇坂郁組(大阪)、35才以上男子単遠藤保樹(山形)、同複佐藤憲策・富田岳彦組(東京)、35才以上女子単大石瞳(福岡)、同複坂田珠美・吉川美希子組(石川)、同混合複古川勝也・石橋津子組(長崎・東京)、40才以上男子単土屋憲法(東京)、同複大貫勝・中島真実組(東京)、40才以上女子単松隈敦子(佐賀)、同複土屋藍子・山本住恵組(東京・愛媛)、同混合複磯貝謙太郎・加藤千里組(愛知)、45才以上男子単金山紀幸(島根)、同複山領篤・玉澤隆義組(広島)、45才以上女子単横手智江美(福岡)、同複金子正子・田村富士美組(福岡)、同混合複正田章二・上田彰子組(東京)、50才以上男子単大和田勉(東京)、同複木村孝・上地稔組(京都・大阪)、50才以上女子単菊池葉子(東京)、同複川谷明子・堂山貴美子組(福岡)、同混合複白木耕太郎・工藤なおみ組(東京)、55才以上男子単上原明(香川)、同複清水正紀・柳敬三組(東京)、55才以上女子単新田豊子(香川)、同複高橋寿美子・佐藤美代子組(宮城・山形)、同混合複宮本英士夫・山本邦子組(大阪・奈良)、60才以上男子単青山忠雄(愛知)、同複斧政男・横関貞夫組(神奈川)、60才以上女子単澄川稔子(兵庫)、同複矢代信子・田倉テイ子組(東京)、同混合複山村徳太郎・今泉静子組(東京・富山)、65才以上男子単松井秋男(東京)、同複松井秋男・渡辺直人組(東京・神奈川)、65才以上女子単桶本百合子(福岡)、同複金子澄子・桶本百合子組(神奈川・福岡)、同混合複古明地正邦・中谷祥子組(東京)、70才以上男子単早川博(茨城)、同複佐藤國晴・廣瀬勇夫組(大分・福岡)、70才以上女子単石井伸子(山口)、同複宇野早苗・石井伸子組(神奈川・山口)、同混合複安田博泰・竹村明子組(神奈川)、75才以上男子単中西久昌(兵庫)、同複伊藤武洋・金丸清昭組(神奈川)、75才以上女子単深町寛子(埼玉)、同複佐々木洋子・江原美智子組(東京・長崎)、75才以上混合複小川揚之輔・成川睿子組(神奈川)、競技役員延1,360名。

(11) 平成26年度第68回全日本総合バドミントン選手権大会

12月2日から12月7日までの6日間、国立代々木競技場第二体育館で男子単52名、同複53組、女子単52名、同複49組、混合複44組、実人員192名の参加を得開催。優勝者は男子単佐々木翔(東京)、同複早川賢一・遠藤大由組(東京)、女子単山口茜(福井)、同複福万尚子・與猶くるみ組(熊本)、混合複早川賢一・松友美佐紀組(東京)、競技役員延960名。

(12) 日本マスターズ2014バドミントン競技会

公益財団法人日本体育協会等との共催事業で、9月19日から9月22日までの4日間、久喜市

総合第1体育館・第2体育館で、男子23都道府県、女子24都道府県、でのリーグ戦を勝ち抜いたチームによるトーナメント戦で実施。実人員317名の参加を得て開催。優勝者は男子石川県、女子東京都、競技役員延620名。

(13) 第69回国民体育体育バドミントン競技会

公益財団法人日本体育協会等との共催事業で、10月13日から10月16日までの4日間、長崎市民体育館で、成年男子47団体、成年女子16団体、少年男子16団体、少年女子32団体、実人員444名の参加を得開催。優勝者は成年男子の部石川県、成年女子の部熊本県、少年男子の部大阪府、少年女子の部福島県、競技役員延780名。

5. バドミントンに関する国際競技会

(1) 大阪インターナショナルチャレンジ2014

4月2日から4月6日までの5日間、守口市民体育館で、男子単32名、同複32組、女子単32名、同複32組、混合複32組、実人員237名(日本選手122名、外国選手115名)の参加を得開催。優勝者は男子単伍家朗(香港)、同複数野健太・山田和司組(日本)、女子単橋本由衣(日本)、同複松尾静香・内藤真実組(日本)、同混合複ムハンマド・リジャルヴンタマリサ組(インドネシア)、競技役員延1,100名。

(2) ヨネックスオープンジャパン2014

6月10日から6月15日までの6日間東京都体育館で、男子単44名、同複44組、女子単42名、同複40組、混合複42組、実人員373名(日本選手175名、外国選手198名)の参加を得開催。優勝者は男子単リー・チョンウェイ(マレーシア)、同複季龍大・柳廷皇組(韓国)、女子単季雪芮(中国)、同複高橋礼華・松友美佐紀組(日本)、同混合複張蕾組(中国) 競技役員延1,260名。

(3) ヨネックス杯国際親善レディースバドミントン大会2014

10月22日から10月26日までの5日間、BODYMAKERコロシアム(大阪府立体育会館)他1会場で、韓国他12ヶ国を迎え、トーナメント戦で実施し、実人員2,011名(日本選手1,837名・外国選手177名)の参加を得開催。優勝者はAゾーン岐阜トリッキーパンダース(日本)、BゾーンChineseTaipeiB(台北)、CゾーンChineseTaipeiC(台北)、DゾーンChineseTaipeiD(台北)、Eゾーン東大阪M. B. C B(大阪)、FゾーンミラクルパワーA(埼玉)、GゾーンミラクルパワーB(埼玉)、HゾーンMi X 70愛知(愛知)が優勝し、国際親善への普及と発展に成果を収めた。競技役員延1,480名。

(4) 第2回日・台小学生交流競技会

6月30日から7月5日までの7日間、味の素トレーニングセンターで、団長阿部秀夫他役員15名、男子15名、女子16名、計46名、台北頼聯旺他役員5名選手男女各10名を迎え開催。成績は男子団体3勝。女子団体3勝。

6. バドミントンに関する国際大会への代表者の選考及び派遣

- (1) 第28回世界男子バドミントン選手権大会（トマス杯）大会及び
第25回世界女子バドミントン選手権大会（ユーパー杯大会）5月15日から5月26日までの12日間、インド国ニューデリー市へ団長芝スミ子他役員7名選手男女各10名、計28名を派遣。成績は男子金メダル。女子銀メダル。
- (2) 日・韓高校生交流競技会
7月1日から7月6日までの6日間、韓国釜山市へ団長林貴昭他役員3名、選手男女各8名、計20名を派遣。成績は男子2勝1敗。女子3勝。
- (3) 第13回世界学生バドミントン選手権大会
7月21日から7月31日までの11日間、スペイン国コルドバ市へ団長宮崎重勝他役員4名、選手男女各6名、計17名を派遣。成績は女子単下田菜都美3位。女子複浦谷夏未・篠田未来組2位。
- (4) 第2回ユースオリンピック
8月13日から8月29日までの17日間、中国南京市へ監督井田貴子、選手男女各1名を派遣。成績は女子単山口茜2位、混合複常山幹太2位。
- (5) 台北ジュニア競技会
派遣中止。
- (6) 韓国ジュニアオープン大会
12月6日から12月15日までの10日間、韓国金泉市へ監督長谷川博幸他役員7名、選手男女各22名を派遣。成績はU-15女子単吉川真白2位、U-19女子単川上紗恵奈優勝、U-15男子複一井亮太・緑川大輝2位、U-19男子複渡辺勇大／三橋健也（富岡高）優勝、U-19女子複志田千陽・松山奈未優勝、U-19混合複渡辺勇大・志田千陽優勝。
- (7) 日・韓ナショナル交流競技会
2月5日から9日までの5日間、韓国済州市監督朴柱奉他役員2名、選手男女各7名を派遣。成績は男女とも0勝2敗。
- (8) 世界ジュニア選手権大会
4月5日から20日までの16日間、マレーシアアロールスター市へ団長阿部秀夫他役員5名、選手男子8名、女子9名を派遣。成績は、団体戦3位、女子単山口茜優勝、大堀彩3位、男子複玉手勝輝／中田政秀2位、混合複渡辺勇大／東野有紗3位。
- (9) 第17回アジア競技大会
9月16日から9月30日までの15日間、韓国仁川市へ監督朴柱奉他役員5名、選手男女各10名を派遣。成績は女子団体3位、女子複高橋礼華・松友美佐紀2位。

7. バドミントンの競技力の向上

(1) スポーツ医科学研究

公益財団法人日本体育協会及び独立行政法人日本スポーツ振興センターの委託事業として、バドミントン選手の合宿時のエネルギー消費量測定と体組成測定を実施し、国際競技力向上のためのメディカルサポートシステム、トレーニング対策やメカニズムを明確にしていくとともに、競技者のコンディション評価に役立てた。また、海外遠征及び合宿時の選手の体調をサポートするため「プレーヤーサポート部会」を設け、海外遠征（ト杯・ユ杯）強化合宿に帯同させ選手のケアを行なった。

(2) アンチドーピング対策

JADA（公益財団法人日本アンチドーピング機構）との協力により「日本ドーピング防止規程」によりドーピング検査を実施し、アンチドーピング対策を実施した。

(3) 選手強化

オリンピックでのメダル獲得を目指し、ナショナルトレーニングセンターの有効活用、選考基準、国際大会への派遣計画の見直し等を行い、ナショナルチームのより一層の選手強化を図った。特に国際大会での活躍に現れ、全英選手権大会では2種目決勝進出する等、好成績をあげた。

また、ジュニア層においては小中高一貫指導により競技力向上を図り、次代の世界選手権大会、オリンピック等に備え、有望選手を発掘し、合宿及び小中高の海外交流を実施、国際大会に派遣する等選手強化体制の充実を図った。

(4) 競技用具補助

競技技術の向上を図るため国際競技会出場選手140名に対し、競技用具を補助した。